子どものスポーツに対する勝利志向態度と重要な他者の関連
The Relationship Between the Professionalized Attitudes Toward Play of Children and Significant Others

飯島俊明　荻原　周
Toshiaki Iijima　Makoto Ogiwara

1. はじめに

この研究は、子どものスポーツによる社会化研究の一環として行われたもので、この小論では、組織的なスポーツ活動への参加を求める時期にある子どものスポーツに対する態度、特に勝利志向と重要な他者との関係について検討を試みた。

今日、子どもの組織的なスポーツ活動が年々隆盛をきわめているが、それに伴い種々の問題が生じてきている。その1つに、スポーツ経験を通して、どのような価値志向が形成されるのかが問題とされている。スポーツにおける競争や卓越すること、相手に勝つことなどの規範は、より大きな社会（産業社会、競争社会）の規範を強化することに役立っているともいえる。しかしながらこれらの業績主義的規準は、フェアプレイやスポーツマンシップといった社会的により望ましい目標としばしば衝突し、時には、競争は協同的側面を失って闘争に変質することもある。

一般に、子どもの組織的なスポーツ活動は大人の関与によって組織され、管理されている。それゆえ子どものスポーツは、大人文化の影響を強く受けていることは否めない。このことは、これまでのスポーツによる社会化研究によって明らかにされている。Coakleyは、[1] プレイ、ゲーム、スポーツの構造の相違と子どものそれらの活動での主体的経験を検討し、未組織ゲームでは、創造性や協力する態度が顕著であるのに対し、組織的スポーツでは、権力や権威を受容する態度が顕著であることを明らかにしている。またWebbは、[2] 競争的スポーツで重要視される3つの価値(fairness or equity, skill, victory)の組み合わせからなる勝利志向態度の尺度(Professionalization Scale)を用いて、子ども（小・中・高校生）のプレイ態度を調査し、組織的なスポーツでは、勝利やスキルに価値をおく態度が形成され易いことを示唆した。Webbと同様の方法を用いたMantelとVeldenの組織的スポーツ参加者と非参加者（11～12才）のスポーツに対する価値志向を比較した研究では、[3] 組織的スポーツ参加者は、勝利やスキルを重視する傾向が強いのに対し、非参加者は、フェアプレイを重視する傾向が強いことが明らかにされている。これと同様の結果が、Maloneyと Petrie、[4] Kiddと Woodman、[5] 小椋他、[6] 飯島[7]などによって報告されている。これらの結果から、子どもの組織的なスポーツ活動は、ルールやスポーツマンシップに従ってプレイするといった社会的、協同的な態度の形成より、むしろ勝利やスキルに価値をおく態度の形成を促す社会化装置として機能しているといえる。

さらに、勝利至上主義的傾向や能力主義的傾向がスポーツにおける「疎外」や「脱落」(drop out)の問題を生み出してきている。[8] Orlickと Botterillは、[9] 子どものスポーツへの大人の過介入がドロップアウトする子どもを作っていることや、技能重視が子どもたちに不安を抱かせていることを明らかにしている。これと関連して、競争的状況から生ずる心理的ストレスが子どもの情緒安定性を損うという指摘や、[10] 子どもへのプレッシャーが心理的不適応を生み易いことや、[11] 道徳性の発達に望ましくない態度を形成し易いことが報告されている。[12]

子どものスポーツに対する価値意識や態度の形成に重要な影響を与える要因として、より具体的文脈の下で、個人と文化の媒介者として大きな影響力をもつ人物、すなわち「重要な他者」(sig-

nificant others) の存在を無視することはできない。これまでの研究を概観すると、スポーツ社会化理論に基づく、Snyder と Spreitzer、[13][14] Greendorfer 他、[15][16] 深沢、[17] 飯島[18] などの研究（大人、特に親の影響力が大きいことや、先生や友だちの影響など）や、役割モデリング法によるBrim とWheeler[19] の研究（仲間の影響について）や、認知論的視点からの McElroy とKirkendall[20] の研究（親の影響が強いこと）などがある。さらに、子どもの勝利志向態度にコーチの影響が強く働いていることを結論づける Albinson[21] 及び Vaz[22] の研究報告がある。一般に、子どものスポーツ態度に大きな影響力をもつ重要な他者として、親、きょうだい、友だち、学校の先生、近隣の大人やコーチなどをあげることができるが、特に親は大きな影響力をもつようである。

また、重要な他者の役割は子どもの性タイプによって異なるようである。これまでのスポーツに対する態度、特に勝利志向(professional orientation) に関する研究では、勝利志向態度は、女子より、男子の方が強いことが明らかにされている (Webb,[1] Petrie,[23] Maloney & Petrie,[4] Kidd & Woodman[5], Loy et al.[24], McElroy & Kirkendall[20], 飯島[7])。前出のMcElroy 他は、スポーツプログラム参加者（11～18才）の勝利志向態度と親の態度との関係を調べ、親の態度は男子の勝利志向態度と関連性があるのに対し、女子の勝利志向態度とは関連性がないことを報告している。スポーツ態度にみられる性差は伝統的な性別役割、特に業績主義的規準をめぐる男女の社会化の差異によるものであり、[1][23] 主に社会化過程の早い時期における要因（重要な他者）の影響によるものとみられている。[25] スポーツ態度は、基本的には性別役割の社会化に大きく影響されていることが示唆される。しかも子ども期における勝利志向態度は成人期を通して持続される傾向が強いことが、小椋他の成人（男子）を対象に行った遡及的調査で明らかにされている。[6] このことからも、子ども期におけるスポーツ態度研究の重要性が示唆される。

以上、本研究を進める上で重要と思われる問題点と先行研究について通観を試みた。ここでは、特に組織的なスポーツ活動への参加を求める時期にあり、且つ性役割習得の社会化が重要視される時期にある子どもを対象として、重要な他者のタイプ及び親の関心の程度と子どもの勝利主義的スポーツ態度の関連について、Webb 尺度を用いて検討してみたい。この分析は、性別に行われ性差についても検討がなされる。

II　対象と方法

上述の目的を遂行するために使用する資料は、上田市の３つの小学校の４～６年生から収集されたものである。調査時期は、1986年10～11月である。調査法は、質問紙による。調査票の配布及び回収は、学級担任の協力を得て行われた。この研究で使用するサンプル数は、回収された調査票のうち集計不能票を除いた男子 473 名（集計率89. 3%）女子 440 名（集計率86. 4%）である。

この研究での重要な他者は、「親、きょうだい、友だち、学校の先生、近隣の大人・コーチのうちで、一番スポーツを教えてくれる人はだれか。」の質問に対する回答によって決められた。

親の関心の程度については、(1) スポーツをすることに対して、力づけてくれたり、教えてくれた程度（親の励まし）と、(2) スポーツ技能に対する親の期待の程度の２項目の質問に対する回答を、それぞれ３段階評定（低い、中間、高い）によって整理した。

子どもの勝利志向態度の測定は、Webb が提起したThree Item Play Scale（前出）とほぼ同様の質問の仕方によってなされた。すなわち、スポーツをする時、(ア)「自分の力をはっきすること」（ベスト）、(イ)「相手に勝つこと」（勝利）、(ウ)「きまりを守ること」（フェアプレイ）の３項目のうち、どれを最も重視するかを重要と思う順番に１、２、３の番号を記入するように求めた。この回答の結果は、勝利志向の最も弱いタイプ（１位フェア、２位ベスト、３位勝利）から、勝利志向の最も強いタイプ（１位勝利、２位ベスト、３位フェア）の６つのカテゴリーに分けられ、それによって回答者各自の勝利志向態度が評定されるのであるが、ここでは、統計的処理上の都合から細分化することを避け、１位の項目について集計することにより勝利志向の程度を評定した。なお

必要に応じて、「フェアプレイ志向型」－「勝利志向型」の二分法による分析を行った。この二分法は、「ベスト」重視が勝利の手段として考えられているか（2位が「勝利」）、それとも活動それ自体やプレイ要素の維持に関心が向けられたものか（2位「フェアプレイ」）によって、二分されたものである。

Ⅲ　結果と考察

勝利志向態度と重要な他者の関係を調べるためにχ^2－検定が用いられた。表1は、子どものスポーツ学習における重要な他者のタイプと子どもの性の関係について示したものである。χ^2－検定の結果によると、重要な他者のタイプと性タイプとは大きく関連性があることが認められる－$\chi^2(4)=46.01$，$P<0.001$。性差は、特に親、先生、近隣の大人・コーチにみられる。男女にとって、最も重要な他者は親である。しかしながら親を最も重要な他者とする者は、女子（31.6％）より、男子（38.5％）の方が多い。これに次いで、男子は近隣の大人・コーチをあげている（23.3％。これに対し女子は12.3％）。女子の場合は、親とほぼ同程度の割合で学校の先生（30.5％。これに対し男子は15.0％）を最も重要な他者として選んでいる。女子は男子に比べて、学校への依存度が高いようである。きょうだいと友だちについては大きな差はみられない。男女とも、約半数に及ぶ者が最も重要な他者に家族成員を選んでいることは注目される（男子48.0％、女子45.0％）。

表1　男女児のスポーツ学習における重要な他者

	男　児（N＝473）	女　児（N＝440）
親	38.5	31.6
きょうだい	9.5	13.4
友　達	13.7	12.3
先　生	15.0	30.5
コーチ・近隣の大人	23.3	12.3
	100.0％	100.0％

$\chi^2(4)=46.01$　　$P<0.001$

表2　男女児のスポーツに対する価値志向

	男　児（N＝473）	女　児（N＝440）
フェア	29.2	33.2
ベスト	53.1	60.9
勝　利	17.8	5.9
	100.0％	100.0％

$\chi^2(2)=30.21$　　$P<0.001$

表2は、性タイプと勝利志向態度の関係について示したものである。性差は、特に「勝利」と「ベスト」のカテゴリーにみられる－$\chi^2(2)=30.21$，$P<0.001$。「勝利」を最も重視する者は、女子（5.9％）より、男子（17.8％）の方が多い。これに対し「ベスト」を最も重視する者は、男子（53.1％）より、女子（60.9％）の方が多い。「フェア」についてはそれほど大きな差はみられないが、若干女子の方が多い。この傾向を二分法（「フェアプレイ志向型」－「勝利志向型」）によって眺めてみよう－$\chi^2(2)=33.10$，$P<0.001$。性差は、この二分法においても認められる。「フェアプレイ志向型」は、女子が83.9％に対し、男子は67.4％である。「勝利志向型」は、女子が16.1％に対し、男子は32.6％である。この結果から、女子は、スポーツの協同的側面やプレイ要素を維持することを重視する態度が強いのに対し、男子は、身体的卓越性やスポーツにおける成功を重視する態度が強いことがうかがわれる。上述の傾向は、先行研究（前出）の結果と一致するものである。

重要な他者のタイプと子どものスポーツに対する価値志向の関係については、表3に示したとうりである。男女とも、重要な他者のタイプと価値志向との間になんらの関連性も存在しないようである－男子　$\chi^2(8)=4.33$，$P>0.05$。女子　$\chi^2(8)=4.10$，$P>0.05$。この結果は、二分法においても同じである。

表4は、親の関心（励ましとスポーツ技能に対す期待）の程度と子どもの勝利志向態度の関係について、性別に調べた結果である。ここで、特に親－子の関係を取り上げた理由は、親は子どもが最初に出会う社会化のエイジェントであり、スポ

表3　重要な他者のタイプと男女児のスポーツに対する価値志向

	親	きょうだい	友　達	先　生	コーチ・近隣の大人
男児（N＝473）	（N＝182）	（N＝45）	（N＝65）	（N＝71）	（N＝110）
フェア	30.8	22.2	33.8	28.2	27.3
ベスト	49.5	62.2	52.3	52.1	56.4
勝利	19.8	15.6	13.8	19.7	16.4
	100.0％	100.0％	100.0％	100.0％	100.0％
	$\chi^2(8)=4.33$　P＞0.05				
女児（N＝440）	（N＝139）	（N＝59）	（N＝54）	（N＝134）	（N＝54）
フェア	30.2	30.5	33.3	35.8	37.0
ベスト	64.0	64.4	59.3	56.7	61.1
勝利	5.8	5.1	7.4	7.5	1.9
	100.0％	100.0％	100.0％	100.0％	100.0％
	$\chi^2(8)=4.10$　P＞0.05				

表4　親の関心の程度と男女児のスポーツに対する価値志向

	スポーツ参加に対する励まし			スポーツ技能に対する期待		
	（低い）	（中間）	（高い）	（低い）	（中間）	（高い）
男児（N＝473）	（N＝83）	（N＝140）	（N＝250）	（N＝168）	（N＝126）	（N＝179）
フェア	31.3	28.6	28.8	36.3	24.6	25.7
ベスト	44.6	56.4	54.0	46.4	59.5	54.7
勝利	24.1	15.0	17.2	17.3	15.9	19.6
	100.0％	100.0％	100.0％	100.0％	100.0％	100.0％
	$\chi^2(4)=4.15$　P＞0.05			$\chi^2(4)=7.66$　P＞0.05		
女児（N＝440）	（N＝91）	（N＝140）	（N＝209）	（N＝175）	（N＝146）	（N＝119）
フェア	38.5	35.0	29.7	38.9	29.5	29.2
ベスト	53.8	58.6	65.6	54.9	61.0	69.9
勝利	7.7	6.4	4.8	6.3	9.6	0.8
	100.0％	100.0％	100.0％	100.0％	100.0％	100.0％
	$\chi^2(4)=4.29$　P＞0.05			$\chi^2(4)=13.96$　P＜0.01		

ーツについても大きな影響力をもつ存在であると考えたからである。このことは、表1においても明らかにされている。しかしながら男子については、スポーツに対する価値志向とスポーツ参加に対する親の励ましの程度、及びスポーツ技能に対する親の期待度との間にはなんらの関連性も認め難いー前者　$\chi^2(4)=4.15$，P＞0.05。後者 $\chi^2(4)=7.66$，P＞0.05。この結果は、二分法（「フェアプレイ志向型」－「勝利志向型」）による分析でも同じである。

女子については、スポーツに対する価値志向と親の励ましの程度との間にはなんらの関連性も認められないー$\chi^2(4)=4.29$，P＞0.05。しかし、スポーツ技能に対する親の期待度との間には関連

性が認められる－$\chi^2(4)=13.96$, $P<0.01$。特に「フェア」と「ベスト」のカテゴリーに差がみられる。「フェア」を最も重視する者は、親の期待度が高い者より（29.2％）、低い者に多い（39.8％）のに対し、「ベスト」を最も重視する者は、親の期待度が低い者より（54.9％）、高い者に多い（69.9％）。しかしながら低率ではあるが、「勝利」を最も重視する者が親の期待度の低い者の方に多いということは注目される（低い者6.3％、高い者0.8％）。この結果を二分法（「フェアプレイ志向型」－「勝利志向型」）により確かめてみた。しかしながら、スポーツ技能に対する親の期待度と女子のスポーツに対する価値志向との間に有意な関係は認められなかった－$\chi^2(2)=0.44$, $P>0.05$。以上の結果から、親の期待が高まるにつれて現われる「ベスト」重視の傾向は、必ずしも勝利主義的態度と結びつくものではないことが示唆される。

Ⅳ まとめ

子どもの競争的なスポーツ活動が盛んになっているが、それに伴い勝利至上主義的傾向や能力主義的傾向が種々の問題を生み出してきている。しかしながら現状では、それに関する体系的な研究が不足している。この研究では、子どもがスポーツ経験を通して、どのような方向へ社会化されていくのかを明らかにするための基礎的資料を得ることを目途として、スポーツへの社会化の初期的段階にある子どもの勝利志向態度と重要な他者の関係について調べた。結果を要約すると、次のとおりである。

子どもの勝利志向態度に性差がみられた。この結果は、先行研究と同じである。この時期（9～12才）の子どものスポーツにおける最も重要な他者は親である。しかしながら、子どものスポーツに対する親の関心の程度と子どもの勝利志向態度との間には明確な関連性を見出すことはできなかった。スポーツ態度にみられる性差は、伝統的な性別役割習得の社会化に大きく影響されていることが示唆される。

一方、McElroy 他が行ったナショナル・ユース・スポーツプログラム参加者の調査では[20]、親の心理的サポートと男子の勝利志向態度との間に関連性があることが明らかにされている。このスポーツプログラムは、経済的に貧困な家庭の子どもたちの社会的、心理的発達を目的として行われているものである。本研究は、子どもたち一般を対象としたもので、特に彼らの家庭状況については考慮されていない。これらのことから、スポーツ態度の形成に働く影響要因として社会的経済的背景は等閑視できないことが示唆される。

この研究では、親の関心の程度と子どものスポーツにおける価値志向との間に明確な関連性は認められなかったが、このことは、親は子どものスポーツ態度の形成と無関係であることを意味するものではない。この研究における分析の枠組はスポーツ社会化のパラダイムに依拠するものであるが、前出のMcElroy 他の研究から、認知論的視点からの検討も合わせて行ってみる必要があるように思われる。さらに、態度の形成に影響を与える要因を確定するためには、青年期を通して態度の変容を追跡していく継継的調査が必要となるであろう。

（1990・1・27受理）

参考文献

1) Coakley, J. J., "Play, Games, and Sport: Development Implications for young People." Annual Meeting of American Alliance for HPERD, 1979.

2) Webb, H., " Professionalization of Attitudes Toward Play Among Adolescents." In G. Kenyon (Ed.), Sociology of Sport. Athletic Institute, 1969, 161–178.

3) Mantel, R., & Vander Velden, L., " The Relationship Between the Professionalization of Attitude Toward Play of Preadolescent Boys and Participation in Organized Sport." In Sage, G. (Ed.), Sport and American Society. Addioon–Wesley, 1974, 172–179.

4) Maloney, T., & Petrie, B., " Professionalization of Attitudes Toward Play Amang Canadian School Pupils as a Function of Sex, Grade, and Athletic Participation." Journal

of Leisure Research, 1972, 4, 184−185.

5) Kidd, T., & Woodman, W., "Sex Orientation Toward Winning in Sport." Research Quarterly, 1975, 46, 476−483.

6) 小椋博、森川貞夫、枝村亮一、「スポーツに対する態度、特に勝利志向の分析」、『スポーツ参与の社会学』体育社会学研究会編、道和書院、1977.

7) 飯島俊明、「学校運動部のスポーツに対する態度、特に価値志向に及ぼす影響について」、『体育・スポーツ社会学研究』 体育・スポーツ社会学研究会編、1982、117-136.

8) 影山健、「スポーツ参与の社会学について」、『スポーツ参与の社会学』体育社会学研究会編、道和書院、1982、3.

9) Orlick, T., & Botterill, C., " Why eliminate Kids?" In A. Tinnakis, T. McIntyre, M. Melnick, & D. Hart(Eds.) Sport Sociology: Contemporary Themes. Kendall/ Hunt, 1976.

10) McPherson, B., " The Child in Competitive Sport: Influence of the Social Milieu." In R. Magill, M. Ash, & F, Smoll (Eds.), Children in Sport: A Contemporary Anthology. Human Kinetics, 1978.

11) Rarick, G., " Competitive Sports in Childhood and Early Adolescence." In R. Magill, M. Ash, & F. Smoll (Eds), Children in Sport: A Contemporary Anthology. Human Kinetics, 1978.

12) Chissom, B.," Moral Behavior of Children Participating in Competitive Sports." In R. Magill, M. Ash, & F. Smoll (Eds.), Children in Sport: A Contemporary Anthology. Human Kinetics, 1978.

13) Snyder, E., & Spreitzer, E., "Family Influence and Involvement in Sports." Research Quarterly, 1973, 44, 249-255.

14) Snyder, E., & Sprditzer, E., " Socialization Comparisons of Adolescent Female Athletes and Musicians." Research Quarterly, 1978, 49, 324−349.

15) Greendorfer, S., & Lewko, J., "Role of Family Members in Sport Socialization of Children." Research Quarterly, 1978, 49, 146−152.

16) Greendorfer, S., Blinde, E., & Pellegrini, A., "Gender Differences in Brazilian Children's Socialization into Sport." International Review of Sport Sociology, 1986, 21(1), 51−63.

17) 深沢宏、「児童の運動への参与に関する研究ー運動部への加入からみたー」、『スポーツ参与の社会学』体育社会学研究会編、道和書院、1977.

18) 飯島俊明、「子どものスポーツへの社会化にみられる家族および家族成員の役割」、『体育・スポーツ社会学研究6』体育・スポーツ社会学研究会編、1987、99-113.

19) Brim, O., & Wheeler, S. (Eds.), Socialization After Childhood. Wiley, 1966.

20) McElroy, M., & Kirkendall, D., " Significant Others and Professionalized Sport Attitudes." Research Quarterly, 1980, 51, 645-653.

21) Albinson, J., " Professionalized Attitudes of Volunteer Coaches Toward Playing a Game." International Review of Sport Sociology, 1973, 8(2), 77−87.

22) Vaz, E., " What Price Victory ? An Analysis of Minor Hockey League Player's Attitudes Towards Winning." International Review of Sport Sociology, 1974, 9(2), 33−55.

23) Petrie, B., " Achievement Orientation in Adolescent Attitudes Toward Play." International Review of Sport Sociology, 1971, 6, 89−101.

24) Loy, J., Birrell, S., & Rose, D., "Attitudes Held Toward Agnostic Activities as a Function of Selected Social Identities." Quest, 1976, 26, 81−89.

25) Nicholson, C. S., " Some Attitudes Associated with Sport Participation Among Junior High School Females." Research Quarterly, 1979, 50, 661−667.